

高崎矢口家における筆写活動 — 写本の奥書を中心に —

紅 林 健 志

はじめに

矢口丹波記念文庫は高崎市八幡町の群馬八幡^{やわたはら}八幡宮の神職を代々務めた、矢口家の蔵書を伝えるものである。現在は、八幡八幡宮の参道添い、矢口家の敷地内にある。矢口家の先代、米三氏のときに蔵書を整理され、新たに建てた離れに移管し現在に至っている。なお、矢口家は現在は神職を離れている。

群馬八幡八幡宮、または上野国一社八幡宮は、かつては八幡村八幡宮、または上野国惣司八幡宮と呼称されていた。天徳元年（九五七）に村上天皇の勅命により、山城国石清水八幡宮を勧請。源頼義が安倍氏討伐の際に祈願し、また源頼朝も木曾義仲討伐の折に参詣したという。近世に入っても、徳川家康以下三代が祈願している。特に家光の尊崇は厚く、慶安年中には神領百石が寄進されている（注¹）。

矢口家には、古典籍の他、書画や文書も数多く残るが、本稿で対象とするのは本号掲載の「矢口丹波記念文庫蔵書目録」収載の古典籍のみである。以下「蔵書」というのは特に断らない限り、この古典籍を指す（注²）。

蔵書の点数は、およそ一六三五点（注³）、うち写本は九三三点（刊本と

の取り合わせ本含む）。写本の中には、102『鷹百首和歌』や、144『新著聞集』、また1109『四ツ谷雑談集』など、先行研究に取り上げられてきたものもいくつか存在する（注⁴）。また特記すべきは、写本の多くに筆写の日時と筆写者を明記した奥書が付されていることであろう。写本九三三点のうち、およそ四九九点が奥書を有する。未詳のものも多いが、三七〇点は矢口家の人間に拠るものであり、その他も概ね、同家や周辺の人物の手になるものであろう。本稿では、この写本の奥書をもとに矢口家の筆写活動の概要を略述する。

一、筆写の時期

『矢口家系図』（矢口米三家文書217、以下「文書」）に拠れば（注⁵）、矢口氏初代茂尊（天正八年（一五八〇）歿）はもと三浦氏、

永禄十一年辰年、松枝小屋城主越前守春継、武田信玄ノ為ニ落城。後ニ君ニ不仕、浪人ス。下板鼻八幡宮ニ大願アリテ一七日参籠、壹神主ノス、メニ因テ二ノ神主ノ養子トナル。此時ヨリ当家ノ姓ヲ名乗、矢口ト改。

とあり、一の祢宜の薦めにより、二の祢宜の養子となったという。また、二代敬重（慶長十一年（一六〇六）歿）のときに、「居宅焼失旧書成灰」とあり、蔵書はこれ以後のものとなるが、本格的な収集というのはいさう少く後であろう。

現存する写本に名前が出るのは七代並保（文化五年（一八〇八）歿）から。ただし、1577『御手本』一点のみ。「上州群馬郡下小島村並保」「延享四歳卯十一月二十五日」と表紙にあり、厳密には奥書とはいえない。また、並保は『矢口家系図』（文書604）に拠れば、親類方青木氏出身の婿養子であり、婿に入ったのは宝暦八年（一七五八）。延享四年（一七四七）の同書は実家から持参したものであろう。なお、実父は青木丑太郎とい（注6）、1386『見一算他』の奥書に名前も出る。矢口家の蔵書には並保の実家より受け継いだものもあると見てよい。しかし、重要なのはやはり八代正喜であらう。奥書に拠って元号ごとに写本の点数を書き出せば、

延宝 一点	享和 三二点
元禄 五点	文化 一四〇点
宝永 二点	文政 一八點
享保 四点	天保 八點
元文 一点	弘化 四點
寛保 一点	嘉永 六點
延享 二點	安政 八點
宝暦 五點	万延 一點
明和 一一點	文久 二點

安永 三九點
天明 六三點
寛政 一一九點
慶応 四點
明治 一六點

となり、他に年次不明、署名のみの奥書をもつものが十点ほどある。元号の性質上、単純な比較はできないが、やはり安永から文化までの点数が群を抜いて多い。これは正喜の存生期間と一致する。そこで、正喜の収集について、以下で詳述する。

二、正喜の筆写活動

矢口正喜。名は正喜ほか、重斯、重友（友重）、重栄を用いた。通称林之助。号は花鳥（花蝶）か。八幡村八幡宮の神職として主殿または丹波正を称した。前掲系図（文書217）に、

矢口丹波正 並保嫡子 雑学好、写本数万卷、求本、神書、算法、秘書、占書、軍談、歌書、誹書、其外雜書写本、読書二向テ夜ノ明ナン
トスルヲ知ラズ。諸門弟子五拾余人。医書ヲ好、難病ヲ助ルコト多シ。
浮世ノ人ニコビ不遊コト仙如シ。六拾壹歳ニテ卒去。隣郷ノ人迄ヲシム。是其徳ナルカナ。于時文政二己卯年六月中八日卒ス。

とあり、文政二年に六十一歳で歿したとの記事が載る。これに拠れば生年は宝暦九年。奥書から年齢が一致するものを挙げ、以下に年表風に整理する。（一）内は署名。考証等を要するものについては▼印をつけて補った。なお、筆写が複数年にまたがるものについては、奥書に署名があれば、重複して取り上げたが、年次のものについては▼印以下に注記すること

どめた。

明和八年（一七七二） 一三歳

三月二日、1522『古手本集』（矢口氏）書写。

▼「矢口氏」とのみ。時期的に正喜のものか。

安永二年（一七七三） 一五歳

三月上旬、1524『古手本集』（矢口林之助）、1521『用文章』（矢口氏）、初秋、704『通夜幽言録』（矢口林之助）、八月、1094『殺法転輪』（矢口林之助）、末秋、689『天草軍談』（矢口林之祐重斯）、一月二四日、1097『慶安太平記』（矢口林之助）、他、776『落穂集』（重斯）書写。

▼689『天草軍談』に「三五愚童写之」「上野国碓氷郡八幡村／矢口林之祐／重斯（花押）」とある。年齢が同じところから、この「林之助（祐重斯）」は正喜と考えられる。『殺法転輪』『天草軍談』『慶安太平記』など、実録が多いのがこの時期の特徴である。ただし、実録の筆写については生涯にわたって行っている。

安永三年（一七七四） 一六歳

六月下旬、1632『箕輪軍記』書写（矢口林之助藤原之重斯）。

▼ここから、矢口家の本姓が藤原氏と知られる。

▼また『箕輪軍記』は寛政三年に再度書写されている。同年の項参照。

安永四年（一七七五） 一七歳

七月四日、566『日向半切』（重斯）、一二月下旬、1088『加賀国敵討』（矢口林之助）書写。

安永五年（一七七六） 一八歳

二月吉日、1014『神路の事ふれ』（矢口林之祐）、同上旬、844『新板／三界一心記』（矢口林之助重斯）、同下旬、1555『手本重宝記』（矢口林之助）、十一月二日、756『唐詩三物』（重斯）書写。

安永六年（一七七七） 一九歳

二月二日、784『小夜時雨』（矢口林之助）書写。

安永七年（一七七八） 二〇歳

五月九日、1627『中臣祓松風鈔』（四五愚童）、閏七月廿六日、1329『参河後風土記』卷四十四・四十五（矢口林之助）、他、570『北条盛衰記』（矢口主殿）書写。

▼『中臣祓松風鈔』は年齢により正喜とした。この年より「主殿」の称を用いる。

▼1329『参河後風土記』の書写は一部のみ。同書は安永四年から断続的に写されているが、本稿では署名のある奥書のみ採録している。なお、同書は『難波戦記』との合綴。これについては天明元年の項参照。

安永八年（一七七九） 二一歳

正月六日、1502『山水秘伝抄』（矢口氏）、二月一日、1264『たみやものがたり』（矢口重斯）、他、1327『通俗呉越軍談』（矢口林之助）書写。

▼『たみやものがたり』奥書には、「安永四己亥歳二月朔日」「矢口重斯二十一歳」とある。己亥は安永四年ではなく、安永八年。年齢も合致するため、こちらに採録。

安永九年（一七八〇） 二二歳

六月上旬、七月二十九日、228『新撰纂集諸家全書大成断易天機 下』
(花鳥)、九月二日、631『鼈頭助語辞』(矢口主殿)、同二二日、613『紫薇字様』(花鳥)。一〇月二〇日、1279『神皇正統記』(矢口主殿)書写。

▼「花鳥(花蝶)」号は、228の奥書に廿二歳とある他、翌天明元年写の869『警討岩井実記』にも廿三歳、十五年後の寛政七年写の684『上瑠璃秘曲集』(こちらは「花蝶」にも三十七歳とあり、正喜と年齢が一致する。さらに、709『通俗漢楚軍談』(安永十年写)の奥書では、巻を換えて、「矢口林之助」と「花蝶」の二つの名で写している。花鳥(花蝶)と正喜を別人とは考えにくい。

またこの「花鳥」号を俳号に持つ人物が、矢口家の俳書中に散見される。文化四年序の20『花供養』に入集するほか、58『(発句集)点取』に二首、62『(精義点発句集)』に六首、79『(咄雪斎点発句集)』に二首、1637『(点取俳諧)』に五首の句を見出せる。62と1637では「天・花鳥」とあり、最高位を獲得している。俳諧にもなかなかの才覚を顕したと思しい。所書きはヤハタ。あるいはこれも正喜のことか。

なお、79と1637には、正喜の子、一シも初号の涼風で出る。
▼また、1485『五色墨』の書写奥書に「安永九年庚子五月十二日写之／雄(花押)二拾二歳」とあり、年齢が一致するので、これも正喜の筆写と考えるべきか。未詳。

天明元年(一七八一) 二三歳

正月一〇日、998『敵討魚名劔』(矢口主殿重斯)、同二二日、1525『古手本集』(廿三歳)、三月、1329『難波戦記』卷五(矢口重斯)、

三月、七月、709『通俗漢楚軍談』(矢口林之助重斯・花蝶)、九月九日、1266『忠臣規矩順從録』(矢口氏)、同二五日、700『厳秘／藤竹武藏鑑』(矢口主殿重友)、同二〇・二二・二五日、1328『通俗三国志』(矢口氏・花蝶)、十一月三日、869『警討岩井実記』(花鳥)書写。
▼1328『通俗三国志』は天明四・五年にも残りを書写している。同年の項参照。
▼この年の九月から、それまでの「重斯」に換えて、「重友」の名を使うようになる。重友の年齢は基本的に正喜と一致する。改名したものと判断した。

▼右に挙げたものの他に、年次未詳ながら「林之助」「重斯」の奥書をもつ写本を以下に列挙すれば、701『近代公実厳秘録』(矢口林之助)、874『油井根元記』(重斯)、931『日光郡鄆枕』(矢口林之助重斯)、1018『天照皇大神宮・弘法大師諸国拔参夢物語』(矢口林之助)、1278『神代卷』(重斯)となる。これらもこの年までに筆写したものであるう。

天明二年(一七八二) 二四歳

五月二七日、145『曾我物語』卷一、五(矢口主殿重友)、他、1325『信長記』(矢口重友)書写。

▼145『曾我物語』卷六、十二は安永五年の書写(署名を未確認のため、同年の項には未載)。なお、「重友」ではなく、「友重」とあるが、年齢が「廿四歳」と一致するので、正喜とした。

天明三年(一七八三) 二五歳

二月二〇日、699『通俗武王軍談』(矢口主殿重友)、四月五、七日、

580『薩琉軍談』(矢口重友)、九月二―二二日、958『普世俗談』(矢口主殿藤原重友) 書写。

▼699『通俗武王軍談』の奥書は複数あり、署名のある巻の日付をとった。その他、正月、二月、十月、十一月に書写している。なお、署名のある巻二十四の奥には「天明二年」「行年廿五歳」とあるが、天明二年に正喜は二十四歳のため齟齬する。同じく同文庫所蔵の『矢口丹波正日記』天明三年正月十八日の条に、「十八 朝より天気善、風吹。武王十四巻書始」とあることを考慮し、天明三年の誤記と判断した。なお、『矢口丹波正日記』は正喜と一多二代の手になる日記だが、本の筆写については、ほとんど記事がなく、この箇所は非常に珍しい。

天明四年(一七八四) 二六歳

正月八―九日、1121『奥平家士敵討細頭記』(矢口主殿藤原重友)、閏正月一七―一八日、167『見聞独歩行』(矢口主殿)、同二五―二七日、1116『秋田杉直物語』(矢口主殿藤原重友)、三月一五―一七日、1115『和州小泉/敵討親子塚』(矢口主殿)、同二四日、159『紅毛談』(矢口主殿)・1260『番町皿屋敷実録』(矢口主殿)、四月三日、696『伊藤一刀斎剣術物語』(矢口主殿)、同二二日、1256『賊禁秘誠談石川五右エ門』(矢口主殿藤原重友)、五月二四―七月一日、1258『古今武家盛衰記按書』(矢口主殿)、六月一五日、1110『石井明道志』(矢口主殿)、八月、967『花秘書』(主殿)、九月二八日、1215『日本水土考』(矢口主殿重友)、一〇月、1084『護国女太平記』(矢口主殿)一〇月二六―一二月七日、1328『通俗三国志』卷三十五―五十(矢口主殿) 書写。

天明五年(一七八五) 二七歳

三月二―二四(卷二)・二七日(卷四)、『通俗三国志』(矢口主殿藤原重友・矢口主殿)、八月一四日、1113『阿淡夢物語/後篇全』(矢口主殿)、同二六日、1114『阿淡夢物語/後篇鳴戸の曙』(矢口主殿)、九月五日、134『徳和歌後万載集』(矢口主殿) 書写。
天明六年(一七八六) 二八歳

二月三―五日、711『婦女武勇集』(矢口主殿)、同六―七日、1262『牡丹畑敵討』(矢口主殿)、四月二―二五日、1108『加州金沢物語実録』(矢口主殿)、八月一四―一五日、702『仇討今様東鑑』(矢口主殿重友)、九月二日(天卷)、同二三日(人卷)、778『神武権衡録』(重友)、同二五日、712『神武権衡録』(矢口氏)、一〇月一日、1099『悪念刃の錆』(矢口主殿) 書写。

▼『神武権衡録』778は天・人卷、712は地卷。

天明七年(一七八七) 二九歳

一月三―七日、609『勢州二宮御祓銘論記』(矢口主殿)、同二日、1292『身軀柱立』(矢口主殿) 書写。

天明八年(一七八八) 三〇歳

正月二日、873『敵討四士談話』(矢口主殿重友)、三月七―九日、1249『火車乗行録』(矢口主殿)、六月二日、929『家内用心集』(矢口主殿)、七月二八―八月一日、1393『開承算法』(矢口主殿)、他、923『家内統集/用心譬喩草』(矢口主殿)、986『仙翁選駒組/将某啓蒙』(矢口主殿) 書写。

▼873『敵討四士談話』の奥書に「上州碓氷郡八幡村 矢口主殿 行年

三十歳 重栄（花押）」とある。年齢や「主殿」の称を用いるところなど、正喜のことと考えて間違いない。前年まで用いていた「重友」はこの年を境にしばらく使われなくなる。改称したということか。ただし文化三年の1162『神代医書大同類聚方』などに使用例がある。後述。

▼また、この年は一点だけだが、和算の本（1393『開承算法』）があることも注目される。和算の本はこれ以前には見られないが、翌年からかなり精力的に筆写するようになり、蔵書全体でも大きな位置を占める。

矢口家が神主を務めた群馬八幡八幡宮には、三点の算額が現存する。その最古のものは文化七年の小野良佐栄重とその門人の奉納になるもの。栄重ははじめ天明七年に算額を奉納、それが摩滅したため、文化七年に再度奉納したという。矢口家にある三種の系図のうち、一種（文書603）は、正喜について、「算術ヲ好、板鼻小野良佐友人タリ」と述べる。天明七年の栄重の算額奉納を契機として、栄重との交誼および正喜の和算への傾倒がはじまったものと考えたい。

小野栄重は、宝暦十三年生。寛政元年に江戸に出て藤田貞資に学ぶ。伊能忠敬について東海と北陸の海岸の測量に従事。享和三年に郷里の上野板鼻に帰り、剣持章行らの門弟を育てた。天保二年死去。六九歳。本姓は須藤。通称は捨五郎、良佐。号は子庵。著作に「弧背真術弁解」「星測量地録」など（注7）。

なお、八幡宮に奉納されている算額のうち一点は、栄重門人の岩井重遠の手になるもの。奉納は、子の一多の代になされている。二代に渡り、栄重一門との交流があったことが窺える（注8）。

寛政元年（一七八九） 三三歳

正月二八（二九日）、1284『天満宮御伝記』（矢口重栄）、二月二（二七日）、1049『活要算法』（矢口主殿）、三月二日、579『雑豆鼻糞軍談』（矢口主殿）、同九（一六日）、1406『拾瓊算法』（矢口主殿）、四月一四日、1362『蝕算法曆率』（矢口主殿）、五月七（下）・一〇日（上中）、1408『精要算法』（矢口主殿）、六月一日、1340『換号之訣』（矢口主殿）、同九（一二日）、764『諸州巡覧記』（矢口主殿）、同二（一二三日）、1085『森鏡邪正録』（矢口主殿）、同二九日、1410『闡微算法』（矢口主殿）、七月二日、859『雨やどり』（矢口氏）、同二（一日）、50『ばせを翁十六篇』（矢口重栄）、一〇月三日、1210『植崎九八郎存念書写』（矢口氏）、同四日、1089『農家功夫伝』（矢口主殿）、一一月一日、1200『地方相伝洗撰集』（矢口重栄）書写。

▼1406『拾瓊算法』は、巻二（五）は三月の書写だが、巻一のみ八月。寛政二年（一七九〇） 三三歳

正月四（五日）、1095『安明問記』（矢口重栄）、同五（六日）、1253『信州仙人床』（矢口重栄）、同六日、1183『屋畑山吹猫物語』（矢口主殿）、同八日、1412『非改精算法』（矢口主殿）、同二〇日、643A『娛息斎詩文集』（矢口主殿）、四月一九（二〇日）、195『等則蒙求百題』（矢口重栄）、五月一日、1369『精要算法解義』（矢口主殿）、六月一（六日）、1050『神壁算法／上下／解惑弁誤』（矢口主殿）、同八日、1374『閨流算術』（矢口主殿）、同二六日、1353『算梯拾卷』（矢口主殿）、八月一二日、1396『竿頭算法 中学算法答術』（矢口主殿）、九月一〇日、1098『女敵討豫讓衣』（矢口主殿）、同二二日、1265『富永伝記』（矢口主殿）、同二六日、1403『算法学海』（矢口

口主殿) 書写。

寛政三年(一七九一) 三三歳

正月一〇日、1516『箕輪軍記実録』(矢口氏重栄)、二月三日、876『浜嶋正兵衛一代記』(矢口主殿)、六月二一・二三日、1087『濃州稚敵討』(矢口主殿)、同一三日、950『絵本雨やどり』(矢口主殿)、一月四日、1407『小学算法』(矢口主殿) 書写。

▼1516だが、『箕輪軍記』は安永三年にすでに書写している(1632)。ただし、1632の奥書には悪筆ゆえ、誤字落字が多い旨を断っている。正確な本文を期して再度書写したものか。

寛政四年(一七九二) 三四歳

正月九日、858『眠の策』(矢口氏)、閏二月五日・七日、1093『甲金録』(矢口重栄)、四月一三・二四日、783『国朝旧章録』(矢口主殿)、五月一七・一九日、1096『阿淡夢物語』(矢口主殿)、同二三日・六月一日、1257『磔軀秀英/敵討狩場野雪』(矢口主殿)、七月二五・二七日、1352『載積之伝』(矢口重栄)、八月一日、1330『一周零約術/自約術埒積』(矢口主殿)、一二月二三・二四日、915『徂徠太平策』(矢口主殿) 書写。

寛政五年(一七九三) 三五歳

正月一日、625『執筆撥鑑法式』(矢口主殿)、同日・五日、866『小長家騷記』(矢口主殿)、二月二日、194『陰陽数元録』(矢口主殿)、三月二二日、1240『譯文筌蹄』(矢口主殿)、四月一九日、1193『地方要法記』(矢口主殿)、七月二六日、51『俳諧七部集』(矢口重栄)、八月二・二七日、319『俳諧三玉抄・俳諧六体・四季百題』(矢口主殿)、

同一九・二〇日、1198『御定法聞書』(矢口主殿)、同二五・二七日、975『経済録』(矢口主殿)、一一月四日、1453『閨の秋風』(矢口主殿重栄)、同二六・二七日、765『南留別志』(矢口主殿) 書写。

▼『譯文筌蹄』『南留別志』など、徂徠の著作が数点見られる。前年の『徂徠太平策』、後の寛政九年の『政談』と併せて、当時の正喜の関心が窺えるところか。

寛政六年(一七九四) 三六歳

一一月一六日、107『三十六哥仙書法伝』(矢口氏)、他、1073『瘡禁厭秘伝集』(矢口主殿) 書写。

寛政七年(一七九五) 三七歳

三月一五・一六日、28『俳諧七部搜/棚さかし』(矢口主殿)、四月一六・一八日、787『滑川談』(矢口主殿)、七月一四日、684『上瑠璃秘曲集』(花蝶)、一一月七・九日、1091『敵討松浦衣笠』(矢口主殿)、九月一〇・一二日、1184『御神君御遺訓』(矢口正喜) 書写。

▼本年から系図の「正喜」を用いる。ただこの「正喜」も享和二年から文化四年の間、使用が確認できず、文化三年に再び「重友」を使用している例があるなど錯綜しており、留意が必要。なお「重栄」は以降使われない。

寛政八年(一七九六) 三八歳

二月一六・二〇日、1313『柳営年中行事』(矢口主殿) 書写。

寛政九年(一七九七) 三九歳

四月一・六日、777『政談』(矢口主殿)、八月六日、949『売卜先生安楽伝授』(矢口主殿) 書写。

寛政一〇年(一七九八) 四〇歳

八月二十七日、1390『新編地方算法集』（矢口正喜）、九月二日、144『秘法腹候伝』（矢口主殿）書写。

寛政二年（一八〇〇） 四二歳

正月六日、1219『道二翁道話』（四十二才）、三月二日、52『鶉衣（前編）』（四十二才）、同一五〇一九日、779『都鄙問答』（矢口主殿）、四月四日、1074『献立合戦』（四十才）、七月一五〇一六日、168『本朝国語』（矢口氏）、八月二日、348『梅毒千斤方』（矢口主殿）、同日、1513『浅間焼大変記』（矢口主殿）、同一二〇一三日、1179『病因考』（矢口主殿）、同一三〇一六日、1148『類聚方』（矢口主殿）、九月四日、1143『刻傷寒論』（矢口氏）書写。

▼この年、『梅毒千斤方』、『病因考』、『類聚方』、『刻傷寒論』の四点の医書を書写している。前掲の系図に「医書ヲ好、難病ヲ助ルコト多シ」とある。医書の筆写が目立つようになるのは、この時期からである。

享和元年（一八〇一） 四三歳

正月六日、44『鶉衣（後編）』（矢口主殿）、同一二日、1411『撥乱算法』（矢口主殿）、七月二四日、1180『医事或問』（矢口主殿）、八月八日、1461『薬徴』（矢口正喜）、一〇月二九日、1086『敵討飯沼始末録』（矢口氏）、十一月二五〇一二月二日、565『豊臣鎮西軍記』（四十三才）、同一六〇二〇日、1157『古方便覧』（矢口氏）、同日、1173『上池秘録続編』（矢口主殿）書写。

▼1086『敵討飯沼始末録』には年齢がない、このころ子の一シ（牧太郎）もさかんに実録を書写しており、厳密に言えどもどちらとも決めがたい。「矢口氏」を使う頻度が正喜の方がやや多いため、仮に正喜とした。また、

享和元年は四十三歳のはずだが、1173『上池秘録続編』には「四十四歳」とある。誤記か。

▼565『豊臣鎮西軍記』は第四冊のみ文化三年写。

享和二年（一八〇二） 四四歳

正月七日、999『厳密秘談集』（矢口主殿）、四月八日、456『漫遊雜記』（矢口氏）、七月一日、1081『田沼物語』（矢口主殿）、九月九日、1626『山脇家法』（矢口主殿）、同一六日、1452『文藻行療』（矢口主殿）、一〇月一三日、1128『療治茶談／四編』（矢口主殿）書写。

享和三年（一八〇三） 四五歳

正月五〇一〇日、192『相学辨蒙』（矢口主殿）、閏正月一日、1354『算法』（矢口主殿）、二月一日、910『我津衛』（矢口）、同二五日、1072『五体和合／躰隠居』（矢口主殿）、三月七日、1158『豎断』（矢口主殿）、六月二六日、560『小夜中山靈鐘記（卷四）』（矢口主殿）、一〇月二八日、1293『諸祓祝詞集』（矢口主殿）、一二月二日、435『本草或問』（矢口主殿）、同一三（卷二）・二九日（卷一）、786『本草綱目纂疏』（矢口主殿）、同一〇日、1255『残編大久保武藏鑑』（矢口主殿）書写。

▼910『我津衛』は心学の本。同書の奥書は「矢口」以下が鼠害により欠けているため、厳密には同定できないが、同時期に『五体和合／躰隠居』というこれも心学の本を書写していることを考慮し、正喜とした。なお、心学は正喜がこの後、精力的に書写してゆくジャンルとなる。

文化元年（一八〇四） 四六歳

四月一九日、151『田園類説(坤巻)』(矢口氏)、同二六日、922
『田園類説(乾巻)』(矢口氏)、九月一四日、862『中山記』(矢口主殿)
書写。

文化二年(一八〇五) 四七歳

正月七日、1164『疹科治法綱』(矢口主殿)、三月九日、781『和
漢雜談夜話抜書』(矢口主殿)、四月一七日、1335①『貸金年賦算同聞
書』(矢口主殿)・1343『裁積伝円壻之解』(矢口主殿)、五月三日、1
609『和解/元亨釈書』(矢口主殿)、八月三日、1112『憲王外記』
(矢口主殿)、同一七〜一八日、144『新著聞集』(矢口主殿)、九月一
七日、1176『幼斎治疫要訳』(矢口主殿)、一二月一四日、154『上
野志略』(矢口主殿)、同二三日、952『劇場粹幕の外』(矢口主殿)書
写。

▼1343は三点を合綴。残り二点は、文化七年と九年に書写している。
当該年参照。

▼他、『加減開整術』(東北大学附属図書館蔵)、『中興和算家系図』(日本
学士院蔵、目録番号五九七四)を書写。どちらも署名は「矢口主殿」。東
北大学附属図書館蔵本については同館の和算資料データベースに、日本
学士院所蔵本については『日本学士院所蔵和算資料目録』(岩波書店、二
〇〇二)にそれぞれ拠った。なお、正喜の書写した和算書については、東
北大学附属図書館に五点、日本学士院に三点所蔵されていることが確認で
きた。後者は目録に拠れば、日本学士院が購入したものという。どのよう
な経緯で市場に出たのかは不明。

文化三年(一八〇六) 四八歳

二月二四日、463『契情買虎之巻』(矢口主殿)、六月七日、140『東
海道中膝栗毛(五編)』(矢口主殿)、九月二〇日〜一〇月六日、1132
『増補愚案口訣』(矢口重口)、一〇月五〜一七日、1159『金匱要略』
(矢口主殿)、同六日、1162『神代医書大同類聚方』(矢口重友)、同
二日、907『一心棚卸』(矢口氏)、一二月二日、1154『医事約説』
(矢口主殿)書写。

▼140『東海道中膝栗毛』はこの後、文化九年まで断続的に書写。なお、
奥書に名前が出ている編次のみ採録の対象とした。

▼その他、前出(享和元年)の565『豊臣鎮西軍記』第四冊もこの年の
書写。

▼1162『神代医書大同類聚方』の奥書には、「文化三丙寅年十月六日
写畢 上州碓氷郡八幡村 矢口重友四十八歳書」とあり、年齢からしても
正喜のことであろう。享和二年から「正喜」の使用を確認できないことも
あり、再度、正喜から重友に戻した可能性もある。また、1132の書写
者は鼠害により、末尾の一字が読み取れないが、1162のことを考えると、
これも「重友」か。

▼1154『医事約説』奥書に「矢口主殿四十七歳写」とある。「四十八」
とあるべきところだが、誤記か。

文化四年(一八〇七) 四九歳

二月二六日、140『東海道中膝栗毛(六編)』(矢口主殿)、三月九日、
1364『新撰綴術(上巻)』(矢口主殿)、1071『新撰綴術(下巻)』
(矢口主殿)、同二七日、27『はせを発句評林』(矢口主殿)、四月六日、
141『鹿島紀行』(矢口主殿)、七月一六日、1357『算法雑記』(矢

口主殿)、八月二日、1409『続神壁算法』(矢口主殿)、九月三日、199『漢書律曆志』(矢口主殿)、同六日、1358『算法雜記』(矢口主殿)、他、126『百人一首解』(矢口主殿)、一二月三日、1123『腹證奇覽/後篇』(矢口主殿)

▼1358『算法雜記』は内題に、「小野栄重写本之写/矢口重友藏書」と記されており、小野栄重との間に蔵書の貸借があったこと、また「重友」称の使用が窺える。

文化五年(一八〇八) 五〇歳

五月三〇日、1122『腹證奇覽』(矢口)、一〇月二七日、1192『和庵遺稿』(正喜)、一月一七日、1052『知心弁疑』(矢口)、二月七日、1202『民家分量記』(矢口氏)書写。

▼この年から再び正喜を使用するようになる。また、文化四年まで使用してきた「主殿」の称は以降使用されない。同年に父並保が歿していることもあり、正式に「丹波」を継いだということか。ただし、正喜が奥書に「丹波」と記した例はない。未詳。

▼1052『知心弁疑』は年齢を記さないが、正喜がこの時期、熱心に書写している心学の本であることから、正喜と判断した。

文化六年(一八〇九) 五一歳

正月三日、912『手嶋先生四書口教』(矢口正喜)、二月一日、1189『民家童蒙解』(矢口氏)、同二五日、865『鬼は外』(矢口正喜)、四月一日、942『有喜世物真似/旧観帖』(矢口正喜)、同八日、904『道二翁 四篇』(矢口正喜)、同二日、905『道二翁道話 五篇』(矢口正喜)、同二三日、882『道得問答』(矢口正喜)、六月五日、9

03『道二道話 三篇』(矢口正喜)、七月二日、109『知寿路久』(矢口正喜)、一月二日、780『中天竺巴旦嶋記』(矢口氏)書写。

▼この年の筆写の大半は心学の本。

文化七年(一八一〇) 五二歳

二月二八日、140『続膝栗毛(初編)』(矢口氏正喜)、七月二七日、1343『毬闕変形草解』(正喜)・1368『精要算法角術解』(正喜)、九月八日、1381『八幡宮奉納算法額面写』(矢口正喜)、同二七日、1361『上方下菱台容球解術』(矢口正喜)、一〇月一日、1211『神君御文写』(矢口正喜)、同四日、400『相宅小鑑』(矢口正喜)、一月八日、1382『奉納額写八幡宮算術額』(五十二才)、同二日、1339『角起術』(矢口正喜)、同二九日、1335②『貸金年賦算同聞書』(正喜)書写。

▼他、『八幡宮奉納算題解義』をこの年著す(東北大学附属図書館蔵)(注9)。なお、文化七年は小野栄重が八幡宮に算額を奉納した年。ゆえに算額関連が数点見られる。

文化八年(一八一) 五三歳

二月二日、1360『拾璣算法容術解/精要算法容術解/梯形円径解』(矢口正喜)、同二五日、1246『風月帖三篇増山井註』(矢口正喜)、閏二月七日、1399『研幾算法』(矢口正喜)、三月二日、193『陰陽五行論』(矢口正喜)、四月一・一二日、877『辻語月見夫婦褒貶女敵討』(矢口正喜)、六月一日、1359『算法桃李蹊徑術』(矢口正喜)、七月二日、140『続膝栗毛(二編)』(矢口正喜)、八月三日、1351『混沌式』(矢口正喜)、同六日、1332『演段三率』(矢口正喜)・1

333『解伏題之法』(矢口正喜)、九月一日、881『商人夜話艸』(矢口正喜)、同二七日、1413『和漢算法記』(矢口正喜)、一二月一(上)・六日(下)、1405『算法点竄指南』(矢口氏正喜)、同七日、1337『活要算法剩一術弁解』(矢口正喜)、他、190『循環曆』(矢口正喜)書写。

▼他、『演段例』(正喜)を書写(日本学士院蔵、目録番号五二五)。

文化九年(一一八二) 五四歳

正月二日、1349『古法式地方実秘録』(矢口正喜)、同一日、865『諸宗鉄槌論』(矢口正喜)、二月、1363『諸法根源』(矢口正喜)、三月二日、1338『嘉言先生活要算法翦管術詳解開書』(矢口正喜)、六月八日、208『周易原象』(矢口正喜)、同二七日、972『菜譜』(矢口正喜)、七月三日、1343『毬闌変形草中心狂之詳解』(矢口正喜)、同七日、1346『鈎股方圓適／等』(矢口正喜)、同一日、1384『丁未算法雜記』(矢口正喜)、八月一・三日、1079『妙術博物荃』(矢口正喜)、一二月二三日、140『続膝栗毛(三編)』(矢口正喜)書写。

▼他、『算法演段品彙』(矢口正喜)を書写(東北大学附属図書館蔵)。

文化一〇年(一一八三) 五五歳

正月四日、1392『算術／開式新法』(矢口正喜)、五月二日、918『心学教諭録 二篇』(矢口正喜)、同一日、1366『精要算法諺解』(矢口正喜)、六月三日、1297『神代講義』(矢口正喜)、七月一日、1341『韓信点兵法』(矢口正喜)、同二五日、1394『開承点兵算法』(矢口正喜)、同二三日、1595『孝行になるの伝授・銀のなる木の伝授』(矢口正喜)、八月二〇日、1379『極数術適尽方級逐乘弁解』(正

喜)、九月、797『本朝象渡来事』(五十五才)、一〇月七日、166『国字詩階梯』(正喜)、一〇月一二日、1356『算法解見題』(矢口正喜)、同二三日、1344『球内九球術』(矢口正喜)、同三〇日、1583『児女教訓以呂波歌／眠覚し余苦』(矢口正喜)書写。

▼他、『綴術弁解』(矢口正喜)、『精要算法諺解』(同)を書写(東北大学附属図書館)。

文化一一年(一一八四) 五六歳

五月一日、970『小笠原驒方産屋の次第』(矢口正喜)、八月四日、165『東都見聞記』(矢口正喜)・618『色紙短冊書法』(矢口正喜)、九月二七日、105『和歌／二条家口伝／飛鳥井家口伝』(矢口正喜)、一二月二・三日、1400『算経』(矢口正喜)、同二三日、1383『榛名額解』(矢口正喜)、他、795『福相になるの伝受』(矢口正喜)書写。

文化一二年(一一八五) 五七歳

三月二七日、220『家相速成』(矢口正喜)、四月一日、1315『山水伝／新造内裏御障子画和歌』(矢口正喜)、同四日、1188『日光御法会二付御触書之写』(正喜)、同二三日、200『家相図解』(矢口氏)、五月三日、43『はせを句解参考』(正喜)、六月一〇日、819『和漢文藻惡語拔粹』(矢口正喜)書写。

文化一三年(一一八六) 五八歳

三月一〇日、484『骨董集(上編上中下)』(矢口正喜)、同二七日、143『骨董集(上編下後)』(矢口正喜)、四月二八日、114『小倉山百人首解』(矢口正喜)、五月八日、106『古今和歌集切紙伝』(矢口正喜)、閏八月一六日、1501『安心成仏宝撮取』(矢口正喜)、同二八日、

1480『月次句競』(矢口正喜)、一二月七日、1367『精要算法下巻七問解』(矢口正喜)、同九日、1385『歩術』(矢口正喜) 書写。

文化一四(二八一七) 五九歳

正月一三日、1022『釜はらい』(矢口正喜)、二月二日、33『正風俳諧奥之捷逕』(矢口正喜)、156『上野国多胡郡／八束羊大夫実録』(矢口正喜)、他、792『東国旅行談』(矢口正喜)、920『本佐録』(矢口正喜) 書写。

▼156『上野国多胡郡／八束羊大夫実録』は上毛の古碑、多胡碑に関するもの。矢口家には多胡碑の拓本用の板木と見られるものも所蔵されており、関心が窺われる。

文政元年(一八一八) 六〇歳

正月二九日、1514『旧聞伝説 利根吾妻両郡』(矢口正喜)、二月一日、1515『高崎御領分町在由緒書』(矢口正喜)、五月二三日、1272『石城明伝』(矢口正喜)、一〇月二日、1347『三角塚術／解術』(矢口氏)、一二月二日、1375『側田中容方維解』(矢口氏) 書写。

文政二年(一八一九) 六一歳

三月二三日、916『心学問答』(矢口正喜)、四月一日、893『富士野往来』(矢口正喜)、閏四月一六日、1169『産方口事』(矢口正喜) 書写。

▼他、『算術解』(矢口正喜)を書写(日本学士院蔵、目録番号三八八一)。

▼同年六月に正喜歿。

年表としてまとめられるのは以上。他に年次未詳のものとして、889

『古状揃』(矢口主殿)、1269『敵討膏藥奴記』(矢口主殿)、1310『伊勢参宮／生年ニ寄テ善惡之事』(矢口主殿)が挙げられる。ただ、一多が主殿を称した例もあるため、厳密には正喜の書写と定められない。

以下、正喜の筆写の特色をまとめれば、若年から生涯にわたり、実録の筆写を行っている。また前述のように、天明七年の栄重の算額奉納を契機として和算書が大きい割合を示すようになる。他、寛政十二年ごろからの医書の筆者も注目される。

また筆写の速度も重要であろう。速度は書物によってまちまちながら、たとえば、1115『和州小泉／敵討親子塚』の奥書に「天明四甲辰歳三月十五日ヨリ同十七日朝五時筆止」とある。1115は大本一冊四八丁。二日から数日が基本か。ただし早い場合は一冊の本を一日で書写する例もある。また、筆写の順序は必ずしも一卷(初編)から順を追って、という形にはなっていない、興味関心のあるところから筆写をすすめていったということか。

三、正喜と一多

正喜に次いで重要なのは、正喜の嫡男、一多いっさんであろう。ただし一多の筆写についてはすでに金田房子「矢口一多年譜稿」(『国文学研究資料館紀要』文学研究篇第三九号(二〇一三・三))に丁寧な跡付けられているので、ここでは改めて整理することはない。矢口一多、天明七年生。名を以真、通称を牧太郎。八幡八幡宮の神職を務め、丹波正を称した。初号は涼風、のち一多、また生々・生々居・生々庵・生々館とも。俳諧宗匠・寺

子屋宗匠として在村文化を担った。明治六年（一八七三）歿。享年八十七歳。

ただし、本号収載の目録には金田稿以降の調査も反映されているので、筆写等については以下を追加できる。

寛政十二年、十四歳のときに、146『平家物語（巻九）』（矢口牧太郎）、152『安中松井田之城主記』（矢口牧太郎）を書写。

嘉永五年（一八五二）、六十六歳のときに、1560『義之十七帖（他二点）』（生々居一之）を書写。

安政二年（一八五五）、六九歳のとき、698『明和鍛冶殺報実録』、裏見返しに「維時安政二年乙卯七月日、矢口以真所持也」とあり、同書を入手したか。

他、年次未詳だが、矢口以真の奥書を持つ、1117『丹後国宮津百姓弥左衛門娘敵討実録』あり。

また金田稿の指摘する一之の初号「涼風」だが、61『〔南岡庵点発句集〕』では、位づけに「天 蓼風」とあるが、本文には出てこない。かわりに「涼風」が頻出。あるいは「蓼風」と書くこともあったか。

また、一之の筆写については、正喜の指導もあったのではないか。465『田舎荘子外篇』は、一之（牧太郎）の奥書のある最も古いものだが、その奥書に、

寛政十一未年 「何月何日」

上埜国碓氷郡八幡邑 矢口牧太郎書之「拾四歳時」

「（花押）」

とある【図1】。「」内は墨の濃淡が異なり、後で書き足されたものであ

ろう。ただし「何月何日」という表現が解せない。思うに、これは筆写の指導ではなからうか。正喜が、若き牧太郎のはじめて筆写した書物に、日付、年齢、花押を付すべきと教示する意図で、「何月何日」等を書き加えたものと解したい。

また、大竹茂雄「矢口家蔵の和算書」（『群馬県和算研究会会報』第一五号、一九八〇・一一）は、

榛名町下里見の中曽根家にある中曽根宗^{むねよし}那の蔵書約三〇〇冊の和算書の中に、弘化二年から同四年の間に写した稿本が三〇冊ほどある。

その大部分は宗那以外の同一人の筆跡である。宗那の孫の慎平翁が生前に話して呉れたところによると、これらの写本は八幡八幡宮の神主であった「丹波さま」に頼んで書いて貰ったのだという。「丹波さま」は字を書くのが早くて、一冊の和算書を一晚で写したとのことであった。（中略）さて初めに述べた中曽根宗那が写本を頼んだ「丹波さま」は正喜の嫡子の以真である。以真は一之と号した俳句の達人でもあった。宗那は矢口家の和算書を借りて勉強し、自分で写したほかに以真にも写本を頼んだのだと思われる。

と、一之は筆写が早く、中曽根宗那に頼まれ、三十冊の和算書を書写したことを述べる。中曽根宗那は文政七年生、明治三十九年歿。関流の和算家で小野栄重の学統に連なる（注10）。安政七年には八幡八幡宮に算額も奉納している。この談話は一之の正喜譲りの筆写の速度を物語るものであろう。写本の数では正喜に及ばないものの、正喜の行った筆写活動は確実に一之に受け継がれたものといえる。

四、その他の写本

その他にも矢口姓の奥書が数点存在する。系図を参照しつつ言及したい。

矢口松五郎 1563『古手本』に「天明二年寅正月廿日 矢口松五郎」とあり。系図に拠れば、並保三男（長男は正喜）、「劍崎邑養子。早世。廿十八（ママ）才卒」とあり（文書604『矢口家系図』）。

矢口要之祐 1526『仮名手本集』に名前が出る。正喜次男（一シの弟）、「榛名山東坊智養子トナル」（文書217『矢口家系図』）。

矢口榎太郎 明治元年の741『算法問答集』に名前が出る。近代の系図に拠れば龍太郎父という。『三浦家・矢口家系譜』（文書603）は利泰とする。それに拠れば、「矢口丹波 同村実縁方篠原平左衛門男。養子ニ来」とある。一シ養子。なお、一シの一女、屋恵については「高崎駅士族内田五郎兵衛へ嫁ス」とある。

矢口龍太郎 弘化三年（一八四六）二月の、1558『臨池制誨式目』に名前が出る。榎太郎長男。

矢口正治 明治一四年の1389『算法雑記』に名前が出る。一シ曾孫（龍太郎の子）。

矢口丹司 明治二六年の1617『化学書』に名前が出る。榎太郎五男。

その他の矢口姓の人物については残念ながら未詳（注11）。なお、所蔵識語や書入れに出る人物については、今回はとりあげていない。

また、85『風雅辨』（大露）、128『（東奥多賀古城）壺碑帖』（金大

露）337『玄峯集』（大露）、1101『禹碑』（岱路）などの奥書に名前が出る「大露」とは、近郷の俳人、金井岱路（寛政四年（一七九二）歿）か（注12）。岱路と矢口家との関係については未詳。なんらかの交流があったということか。

おわりに

以上、矢口家の筆写活動について現在判明した限りで概略を述べた。写本群の中核は正喜の筆写に拠るものである。そして正喜の筆写は、子の一シにも受け継がれた。しかし、一シの後の収集はやや散発的でまとまったものとはいえない。

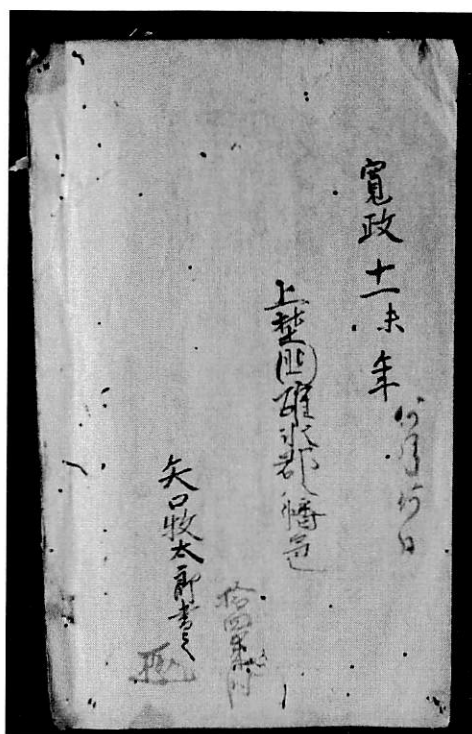
正喜の筆写活動と文芸との関わりについていえば、やはり実録の筆写が注目される。地方の知識層が実録という文芸とどのように向き合い、それをどう享受してきたかを編年体で跡付けられる矢口家の蔵書は大変貴重なものである。

また、285『播州皿屋舗』、948『黄表紙集』には、借りた本を矢口氏（または牧太郎方）へ返却するようにとの書き入れが見られる。これに拠れば、本の貸し出しも行っていたようである。正喜や一シが筆写した本には、医書や家相、暦占などが見られるが、これらは地域の人々の相談に応えることを旨として収集されたものであろう。また上毛関連の古典籍も多数所蔵されており、ひとつの文化的な拠点となっていたものと考えられる。

この、地域の文化的な拠点として、矢口家がどう機能していたかを解き

明かすことで、今回充分に説き及べなかった歌書や俳書、また板本の収集との関連などは少しづつ明らかになってゆくことであろう。本稿はその基礎作業として写本の奥書について述べた次第である。

【図1】



注

- (1) 平凡社日本歴史地名大系『群馬県の地名』『八幡八幡宮』の項参照。
- (2) 書画については未整理。文書は高崎市史編纂室が「矢口米三家文書」として目録にしている。なお、「矢口丹波記念文庫蔵書目録」のうちには、内容的に文書と見なしうるものも数点含まれるが、本稿では古典籍に准じて扱った。
- (3) 目録番号の上では、一六三九点を数えるが、三四四、一四一九から一四二五、

一五九一が欠番。またひとつの整理番号で二点以上の書物を収載する場合（一九九、四二四、四四七、六四三、六五〇）もあり、整理すると一六三五点となる。

- (4) 山本一「「やまひめに」類鷹百首の伝本について」（『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』二号、二〇一〇・二）。大久保順子『『続著聞集』解題』（『仮名草子集成』四十六卷）。小二田誠二「怪談物実録の位相」（長谷川強編『近世文学俯瞰』汲古書院、一九九七）。

- (5) 矢口米三家文書には三種の矢口家系図（文書217、603、604）が収まる。記述に細かな差異があるが、相補的なものと考えられる。

- (6) 『名謁』（文書684）に拠る。

- (7) 『日本人名事典』および『安中市史』に拠った。

- (8) 一多と岩井重遠の交流については金田房子「矢口一多年譜稿」注5参照。

- (9) 前掲和算資料データベースに、「矢口正喜編」とあるのに拠った。原本未見。

- (10) 『関流宗統八伝 中曽根宗那—生涯と業績—』（中曽根慎吾、一九七五）。

- (11) 正喜より後の代の人名について、判明している限りを挙げる。まず正喜の子から。

一女 谷（文書603では、橘女か）

二男 主殿（一多をさす）

三男 要之助

四女 キサ

五女 不与（以上、文書604『矢口家系図』に拠る）

一多妻は「まさ」、一女は「やゑ」という。他に子はなく、養子榎太郎（利泰）の子については、

一男 龍太郎

二男 光太郎

三女 すま

四女 ふみ

五男 登喜次郎

六男 憲司

七男 丹司（以上、文書603『三浦家・矢口家系譜』に拠る）
が系図より知られる。

（12）『上州の俳諧』（あかぎ出版、一九九二）に拠る。他、奥書ではないが俗路関係の書物として、63『吾妻社奉納』、512『大藤俳文集』などが挙げられる。

【附記】本稿は、国文学研究資料館基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」（平成二三年度～二五年度）の一環として、矢口丹波記念文庫担当チームの調査研究を通じて得た成果をもとに、紅林がまとめたものである。